
エンド・ワールド

くす玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンド・ワールド

【Nコード】

N7181F

【作者名】

くす玉

【あらすじ】

村に住む、ミナト。村を出た、ゼン。そして奴ら。そんなこんなを描いた作品です

ブローグ

全てはハッピーエンドなのかな？

これは僕がずっと抱えてきた疑問だ。

仮定してみよう。「全てがハッピーエンドだったら」って。

サッカー選手は必ず点を決めちゃうし、野球選手のピッチャーは全てのバッターに対して全て三球三振、バスケットや全試合全ての得点をたたき出す事だって。

そしてその人達は栄光を手にしたまま、引退する。

もしその時までの自伝があつたらハッピーエンドだ。

でもそんな事なんて有り得ない。ハッピーエンドはこの世には無いから。

なんで僕がこんな事を初めに書いたか、それはこの作品がまずハッピーエンドでないからだ。

ハッピーエンド、最後にはみんなが笑って終わる。そんな話は現実にはないよ。

「世界を変えちゃおうぜ」

僕の物語はあいつのこの言葉から始まることになる。

今でも思う。

もしあいつがこんなことを言わなければあいつは今でも生きていたのだろうか。

もしあいつが僕と親友じゃなかったらあいつは死ななかったのだろうか。

人間は裏切る。

でもあいつは裏切らなかった。

心だけは完璧な人間だった。

でも1つ間違いを犯した。

死ぬ前に、いやたぶんもつと前から……

プロローグ（後書き）

ロコミとかよろしく願います

第一章　第一部始

「俺がさ、英雄になったらお前どうする？」

「お前がなれるわけ無いじゃん。なるのは僕だもん」

こんな会話をゼンとしていた。今思うと笑える。英雄になれる人なんてそういない。僕もそれじゃない。それを時が経つにつれ、分かってしまった。

子どもの頃は自分には英雄の才能があるって事を信じて疑わなかった。ゼンもそうだった。僕らは、違う仲間を持ってそれぞれの道を行き、最後の最後の決戦で戦うと決めていた。それまでは、お互いの事を人を伝って知るだけ。なんて二人で考えていた。

あの頃から6年時を経た。ゼンは村を出て、英雄の道を進んだ。14歳の時だった。僕は村に残った。今は父さんの後を次ぐつもりだ。

平凡な毎日を送って、もつと歳をとったらセンナと結婚して、子どもが出来て、子どもが僕の仕事を次ぐ頃になったら、仕事も辞めてのんびり暮らす。

僕は16歳だ。この年頃じゃ、村にとっては貴重な労働力で村の仕事のほとんどには僕が関与している。その中の1つの仕事場で出会ったのがセンナだった。

センナは僕の好みの女の子だった。活発で、男勝りで。それに同年だった。

僕とセンナは互いを好きになった。今付き合っている。

この村には1つの家に1つずつ剣がある。それはこの村の掟だ。いやこの村だけじゃないのかもしれない。僕はこの村から出たことがない。そりゃあ、狩りに行ったりして少しは出たことはあるけど。それぐらいは村のみんななら誰だってある。

村の外の世界を見るためには村を出なければ行けない。ゼンのように。

そう言えばゼンは今頃何をしているのだろうか。あいつのことだから共鳴する剣を見つけて戦いに明け暮れているんだろうな。

「ミナト、ちょっと鹿でも狩ってきてくれねえか？」

「分かったよ。父さん」

そう、僕の名前はミナト。子どもの頃は女みたいな名前だってゼンに良くからかわれた。

僕は家の剣を取って、森に行った。

僕は村でじゃ一番足が速い。あのゼンよりも速かった。ちょっとした足の力加減でどんな速さにも調節できた。だからもちろん鹿にだって追いつくことだって出来る。

雄の鹿がいた。今は単独行動をしている。チャンスだ。

僕はそうつと近寄って一気に捕まえた。鹿の足を全部剣で斬り、首元を思いっきり握る。こうすると逃げられない上に窒息してあまり傷ついていない状態で捕まえられる。僕が考えた。

僕よりも大きい影が出てきた。僕が不思議に思って、振り返るとドラゴンがいた。

赤いドラゴン。レッドドラゴだ。

ドラゴンには階級がある。順番にブルードラゴ、イエロードラゴ、レッドドラゴ、シルバードラゴ、ゴールドドラゴ。後になるにつれて階級は上がっていく。つまり強くなっていく。

その五階級の中の3階のドラゴンが今、僕の前にいる。僕が教わったドラゴンの対処法はこうだ。

逃げる。他のことは考えるな。

僕は教訓に従った。全神経を足に集中させ、逃げた。

「おいおい、せっかく里帰りしてそのお出迎えはねえだろ？」

その声は逃げることに集中していた僕の耳にしっかりと届いていた。

「久しぶりだな、ミナト」

「いつ帰ったんだよ」

僕は笑っていった。

「ゼン」

第一章↳第一部始↳（後書き）

□□ミお願いしマッスル

第二章

「お前の力を借りたいんだ」

「は？」

「まあ正確に言えばお前の足なんだけどな」

ゼンと僕は今、村には帰らずに話している。ゼンのドラゴンがいてはとも村には帰れないからだ。

「俺、殺古のピラミッドに行くんだ」

「殺古のピラミッドつつたら、出てこれないで有名じゃないか」

「いや、有名なんてモンじゃないさ。もう世界中にまで噂は広がってる。あそこには昔のレジェンドが隠した宝があるらしいからな」

殺古のピラミッド。村から少し行ったところにある、カナリ古いピラミッドだ。しかも入った人が二度と出てこれないことから、秘密があると言われている。やれ、宝の美しさに目を奪われ、そこで生涯をすごそうと思って出てこないだの。やれ、迷っただの。噂は数え切れない。

「そこで俺はあそこに行く。そんで宝モンでもごっそり持って帰って、俺の強さを広める」

「はっ。全く変わって無いみたいだな」

「じゃあ、お前は変わったのか？」

ゼンが僕の方をじっと見た。

僕は笑って答えた。

「変わっちゃいないさ」

僕は親に村を少し、後にすると伝えゼンと待ち合わせた場所へ向かった。ゼンにはすでに仲間が二人いるらしい。

僕の武器は僕の家にある剣。まあ剣と言えるかも分からない短刀つて感じの剣だ。でも素早く動ける僕には無駄に大きい剣よりもこういった小さい奴の方がいいかもしれない。

約束の場所に行くとゼンともう二人の仲間がいた。

「ミナト、こいつがハクだ。そしてこっちがミツ」

二人が僕に手を差し出してきた。僕は初めて会う人とは気軽に手をつかわしたくは無かったけど、笑って握手した。

ハクは背が高く、髪の毛がない。武器は鎌のような者だ。鎌の先から何かがしたたり落ちていて、僕は身震いをした。

ミツは、ハクとは反対に髪の毛のきれいな女の子だった。背がすごい低く、目の色がブルーだで顔立ちが良かった。僕はゼンが惚れて仲間にしたのかと思った。そして武器はボウガンだった。

ピラミッドに行くまでに僕たちは結束力を深めようとして色々なことをしたが、結局意味が無かった。でも協力できるのなら正直、友情とかは全然入らないと思う。

僕は、短刀の事を聞かれて戸惑いながらも答えた。あいまいな答えばかり出したから話術が得意じゃないと思われたかもしれないけど、本当にしらないのだからしょうがない。

ピラミッドの前に着くとゼンが仕切った。

「今からピラミッドに入るけど、入った瞬間から集中切らせんじゃねえぞ」

「俺がそんなことするわけないだろーが」

「私だつて」

「・・・」

「どうなんだよ？ミナト」

僕は笑いながら右手の親指を立てた。

第二章（後書き）

□□□よろしくお願いします

第三章

ピラミッドの中はジメジメしていて、簡単に言つと湿っていた。僕は壁に触りながらゼン達に着いていった。ゼン達はもうこの手の仕事は慣れているようでピラミッド自体に恐れることもなくズカズカ中に入っていた。

でも、そんなにうまくいくはずもなく、直ぐに行き止まりになってしまった。

「俺達が、ここまで来た道で他の道は無かったよな」

「ああ」

「そういうことなら、こつから先にも進めるってこつた」

確かにそうだ。だけど道が無いのにどうやって進む？

ゼン達は壁を探り始めた。

「なにしてるの？」

「こつという壁は何かスイッチとか、そう言う仕掛けがあるの」

「レジェンドなら、力でこの壁突き破っちゃえばいいじゃん」

「そう簡単にいかないの。レジェンドの力で壊せない仕掛けも施されているわ」

「ふん」

僕も見よう見まねでやってみた。適当に壁を触るただけだ。

壁は石が何段も積み重なってできていた。ザラザラしていて、見た目から言つて削って作られたようだ。この石には特別な効力があつて、それでレジェンドの力を封じているのだろうか。そうだとしたら、この石を持っていればレジェンドに対して有利だ。と仕掛けと

は関係なしの事を考えながら、ぺたぺた触っていた。

「あつたぜ」

ハクが言うのと僕以外のみんなが集まった。僕はみんながやってくれ
ると思い近づかなかつた。まあ単に面倒くさかつたのだ。

「お前もさつさと来いよ」

ゼンに呼ばれてやつと僕は行った。僕は最初、ハクが見つけたとい
うスイッチ（？）を見つけることが出来なかつた。それもそのはず、
スイッチは石と石の間の僅かなすき間にあつた。しかも、そのすき
間のさらに奥。すき間の奥にはすき間よりも大きな空間があつて、
そこにレバーがあつた。

「オレがやるぞっ」

とゼンが言つた。

ハクは普通に答えた。

「当たり前だろ」

でもなんで当たり前なのだろう？

ゼンがレバー引くと行き止まりだつた壁が少し開いた。でも一人が
やつと通れるほどの間だつた。

「ここはオレしかいねえな」

ゼンがみんなを制した。

「まあ、この状況ではゼンが一番だろうね」

「そうだな」

「？」

僕はみんなが話している意味が分からなかつた。

「な、なんでゼンなんだよ？」

僕が素直に聞くとあ、そうかといいいながらハクとミツが笑つた。

「まあ見てりゃわかるさ」

ゼンは振り返つてそう言つた後、何の恐れも見せずに奥へ進んでい

った。ゼンが間を通過って、さらに進もうとすると両側の壁から鋭利なものが飛んできた。僕が一步前に行こうとしたら、ハクが僕の前に手を出して行かせてくれなかった。

「なんで?!」

「あいつが見てろって言ったろ」

ゼンは何の動揺もせずと言った。

ゼンに鋭利なものが突き刺さった。

でも・・・

鋭利なものはゼンの体を突き抜けていった。次々に鋭利なものがゼンの体をすり抜けていく。圧巻だった。たぶん、今の僕は口が開いたままでさぞかし滑稽だろう。

「な？」

「・・・どうなってんだよ？」

僕は今、混乱のまっただ中だった。

第三章（後書き）

□□□□お願いします

第四章（前書き）

遅くなつてすいませんでした

第四章

僕はゼンを見つめる事しかできなかった。矢によって貫かれたはずのゼンを。でもゼンは僕の不安を気にもせず、ただ立っていた。まるでそこで何も起こらなかったかのように。ゼンの体からは水が滴り落ちていた。

「あれがゼンの能力だよ。まあ、オレも男としちゃ恥ずかしい事に今のあんたと同じような感じになったな。あれを見たときは」

「・・・」

やっと分かった。なんでゼンがあんな狭いスキ間の奥にあるレバーを引くことが出来たのか。あの時は全然気にしていなかったけど。それはゼンの腕が液体になったからだ。液体になればスキ間が大きかるうが狭かるうがそんなことは全く関係ない。

「ゼンにはどんな物理的攻撃も効かない」

「たかが液体って思ってる痛い目に会ってことよ」

「・・・そうみたいだな」

ゼンは首を左右に動かした後、こっちを向いた。顔は何とか原型を保っているが、ところどころに汗のような水があった。

「もういいだろっ。もう何もねえよ」

「分かったわ」

ミツがゼンの後続き、中に入って行った。

「ぼ、ぼくは？」

「あんたは次だ。早く行けよ」

「うるせえ」

前からゼン、ミツ、僕、ハクという序列になった。たぶんミツと僕は弱いから強い人の中に入れたのだろう。みんなの配慮は確かに正しいけど、僕の気分を損ねることになった。

入り口から遠ざかっていくことに暗くなり、結局は何も見えないぐ

らいになつてしまった。僕の目の前にはハクがいるハズだ。ハクの足跡を頼りに僕はみんなに付いていった。その動きは中々大変で、僕は何度かハク達を見失いそうになった。

「なあ、宝モンってどこにあるの？」

「全然まだだろうな。一個しか毘がない」

「それにこれだけでここに入ってきた奴らが全員帰ってこないって理由にもならんしな」

「そ、そうか」

僕は意味のない質問をしたことに気づいた。そうだ、これだけなワケがない。まだ何かがあるに決まっている。何かがあるにね。

また突き当たりに来てしまった。どうやらこのピラミッドの設計図を書いた人は行き止まりが好きらしい。そうじゃないとしたら、絶対に人を怒らすのが得意な人だ。

だけど今回は簡単だった。目の前にボタンがあったのだ。ゼンはそれをためらわずに押した。きっと何が起ころうとも大丈夫と思っていたのだらう。ゼンの予想は当たり何もなかった。

でも僕だけ気づいた物がある。開いた壁のすき間に光っている二つ物があったのだ。僕はそれを眺めてから拾った。別にゼン達に言う必要も無いと思ったから言わなかった。

僕が拾った二つの物は五芒星の石の様な物だった。簡単に言うと星形（ ）だ。もしや、これがゼン達の探している宝かな、とか思いながらもそうじゃない事を分かっていたから僕はポケットにしまっておいた。それが後々どんな役割を果たすかも知らずに……

第四章（後書き）

□□□□とコメントお願いします

第五章

罨は今まで確かに沢山あった。

あれから僕たちは数々の罨をくぐり抜けてきた。中にはびっくりする罨もあったけど、それなりにゼンが片付けた。

広間に出た。相当大きい広間に。天井まで50メートルぐらいはありそうだ。

するといきなり壁を突き破って巨大な蛇が出てきた。僕は蛇が大嫌いだ。あの鱗、脚や手の無い胴体、そして何よりあの口や顔に嫌悪を覚えた。

このときは蛇を恐れてしまった自分にむかついた。今まで出会った蛇は全部殺している。こいつだって例外じゃない。それに僕は蛇を見ると闘争心が湧くんだ。今の僕に平常心なんてないね。

「ちょっと面かせや」

僕は跳んだ。脚にいったいの力を込めて大蛇の方へ跳んだ。僕は短刀を空中で構え、大蛇の目に向かって思いっきり投げた。その短刀はしっかり大蛇の目に当たり、大蛇はたじろいだ。僕は蛇の鼻の上に落下するように落ちて、かかと落としを喰らわせた。

「クソ蛇がつ!!!」

僕はかかと落としをする際に大蛇から短刀を抜き取っておいた。その地面に落ちている時に、抜き取った短刀で大蛇の体を切り裂いた。

大蛇を切り裂きながら落下した。大蛇の鱗は結構堅くて僕の腕は悲鳴を上げた。もし、落下の力をかりていなかったらもうとつくに僕の腕は壊れているだろう。

大蛇が後ろへひっくり返るように倒れたところで僕は後ろを向いた。ゼン達が僕を何だこいつは？と言う目で見ていた。

僕が蛇を嫌いになったのはちょうどゼンが旅に出たのと同じくらいだ。僕はそのことを思い出し、愛想笑い浮かべてゼン達に歩み寄った。するとゼンが笑みを浮かべた。

「油断は禁物だぜ？」

後ろで甲高い鳴き声がした。

「ミナトちゃん」

僕はゼンが何を言ったのか、いまいち聞き取れなかった。なぜなら体が、精神が大蛇に向いている。つまり殺したと思っていたハズの大蛇に気を取られたからだ。

大蛇はさっきよりも殺気立っていた。まず目が違う。さっきの大蛇の気持ちとしてはちよつと遊んでやるか、とかそんな感じだっただろう。だけど今は違う。絶対に殺す、そう言う目をしている。僕の体が震えた。大蛇におびえているのだ。そんな自分にまたしても腹が立った。

「俺がミナトの変わりに殺ってやるよ」

後ろから水の塊が飛んできた。よくみるとゼンだった。ゼン自身が

大蛇の口に入った。そのまま腹にいったらしい。大蛇の口からゴクンと言う音が漏れた。

「ゼンツ!!!」

「そんな慌てないでないで」

ミツが落ち着きを払って僕をなだめる。でもそれどころではない。ゼンが飲み込まれたんだぞ?!

「っざけんなつ。あいつはダチなんだ。僕が助けてや・・・」
「助けてもらわなくて結構」

ゼンは大蛇の腹をぶち破って出てきた。

僕は待たしてもこいつらにやられたのだ。

途中参加とは中々傷つくものだとこの時に痛感した。

第五章（後書き）

□□□□とコメントお願いします

第六章

俺はまずピラミッドでの計画を成功させる。それが俺の最初の使命だ。

俺は村を出てから色々な場所を巡った。仲間も何人が出来たがみんな旅の途中で死んだ。仕方が無かった。俺ではどうしようもなかった。

まあ今はそんなことはどうでもいい。俺は旅の途中で興味深い計画を聞いた。人類の滅亡計画だ。初めは相手にもしなかった。人類が滅亡？ふざけてる。そんな簡単にできるものじゃない。今まで何人もの偉人がやろうとして失敗してきたことだ。たかが計画を立てただけで、実行に移せるわけでも成功するわけでもない。

だがそれは違った。奴らは本当にやろうとしている。人類を滅亡させようとしているのだ。俺は村を出て、その事実を知った後ずっと奴らのことを追っていた。そして奴らの組織名をつかんだ。それが「レセル」だった。

奴らの組織は少人数で構成されている。俺も何度か会った。そして戦った。そのたびに全治何ヶ月という傷を負った。

俺は気づいたんだ。俺じゃ「レセル」は倒せない。計画すらも失敗にさせられない。それぐらい奴らは強かった。

才能の問題だと思った。俺を遙かにしのぐ才能の持ち主、根気や性格、それらがそろっている人間。俺の近くにいる誰か。

そう、ミナトだ。小さい頃あいつに喧嘩で勝った記憶がない。かけっこで勝った記憶もない。きっとミナトは俺なんかよりもでかい才能を持っている。そしてそれを存分に使いこなす気持ちもある。ミナトしかない。

「レセル」を倒すのはミナトしかない。そう思ったから村に帰ってきた。そしてミナトをピラミッドに呼んだ。ミツ、ハク、そして今ミナトと一緒にいる俺は俺が作った人形だ。俺の本当の能力を使えば難しいことじゃなかった。

これから俺がミナトにすることを考えただけで俺は腸が煮えくりかえる。自分が不甲斐ない。ミナトに託すことしか出来ないなんて。

さて、俺はこの先ミナトから恨まれる存在になるだろう。だけどそれで良い。

ミナトがここにたどり着いたら何て言おうか。俺がミナトをだます最初の言葉。そうだ、あれがいい。

「世界を変えちゃおうぜ」

俺がミナトにこう言えば必ず、ミナトは俺の敵になるから。

なんでこんな事が分かるかって？

そんなの決まってるじゃないか。

ミナトは俺の親友だからさ。

第六章（後書き）

□□□□とコメントお願いします

第七章

僕が大蛇を倒した後（まあ正確にはゼンが）、僕以外の一同は「もうすぐだ」と何回か言っていた。僕にはその意味がよく分からなかった。なんでもうすぐなのか。なんでそれをこいつらは知っているのか。

「やっぱり、何年も会ってないと偽物か本物かの区別もつかなくなっちゃうのかなあ」

いきなりゼンが言い出した。

「何言ってるんだよ、ゼン」

「だから、俺は偽物だって言ってるんだよ」

「は！？」

僕は混乱した。またワケの分からぬ事を言い出したと思った。

「本当の俺は……」

ゼンが通路のずっと先を指さした。

「ほら、あっちにいるじゃないか」

暗闇の中からコツツ、コツツと誰かが歩いてくる音がした。

もう何も考えられない。僕は口をあんぐり開けていた。

「やあ、久しぶりだな。親友」

暗闇からあらわれたのは僕の隣りにいるゼンを全く同じゼンだった。

「うまいモンだろ？昔から結構人形作りは得意だったんだ」

そう言つてゼンが（暗闇から来た方のゼンだ）指をパチンツと鳴らすと、俺の隣のゼンが水蒸気になって消えた。ゼンだけではなくハクやミツも消えていった。

「どうなつてんだよ？」

「どうもこうも、見りゃ分かるだろ？俺が本物なんだよ」

「なんで？何でこんな事したんだ？いたずらにしちゃ度が過ぎてんじゃないのか」

「まあ、人形の俺が言つてたことは忘れてくれ。アレは全部嘘だ」

ゼンは「こつちに来いよ」と言つて出てきた方向へ歩いていった。僕は従うしかなかった。それよりも僕の中でゼンに対する新しい気持ちが生えてきた。

恐怖心

僕は今、確実にゼンを恐れている。恐怖している。

「俺がお前に対しての本当の目的はなんだと思つ？」

「・・・・・・」

「分からねえか。そりゃそうだ」

「・・・・・・」

「お前が拾つたあの五等星の石は持つとけ。後々大事になってくる」

僕は唾を飲んだ。こいつも人形ではないか？そもそも、ここにゼンはいるのか。

「なあ、ミナト」

ゼンがいきなり振り返った。

「世界を変えちゃおうぜ」

僕の体に電流みたいな感覚が走った。

何か運命的な言葉を聞き取った様な気がした。

第七章（後書き）

これから月曜になるべく投稿するようになりまーす

第八章

「世界を変えちゃおうぜ」

ゼンがしゃべり出した。

「今の世の中は腐ってる。俺は村を出て、いくつもの街へ行つた。そこでは俺が村からの人間ってだけで軽蔑されたんだ。何もかもの権利があそこでは俺から奪い取られたんだ。それでいい気になってる貴族達がいるんだ。お前は許せるか？そんな奴らが頂点に立っているのが許せるか？身分だけで人間が決まるワケじゃないだろう。そんなこと誰だって分かってたよ。けどあいつらに逆らうと何をされるか分かんねえ。殺されるかもしれねえ。あいつらは俺よりもずっと強いレジェンドを雇ってたからな。でも俺が世界の頂点に立てば、今の世界を変えられる。俺達に有利な世界を創れるんだ。分かるよな？」

「……分からねえよ」

僕の中からゼンに対する恐怖心が消えた。

「そんなの頂点が入れ替わるだけじゃねえか。結局お前だって支配欲に捕らわれているだけじゃねえか。そしたら僕らの変わりに不幸になる人々が出てきちゃうじゃないか！」

「その不幸になる奴らは今の調子に乗ってる貴族達なんだよ！！」

「もつと違うやり方で世界を変えられるはずだよ！」

「それが出来ないから言ってるんだろ！何で分かんないんだっ。俺達を村へ追いやったのも、自分たちだけ幸せな生活をしているのも、この世界の法律や常識を作ってるのもあいつらなんだよ！」

「僕は村の生活が不幸だなんて思ったことは無いよっ！」

僕の言葉にゼンの眉がピクツと動いた。

「ミナト、てめえはドコまで腰抜けなんだよ！ドコまで野良犬根性が染みこんでんだよ」

哀れ、そんな目でゼンは僕の方を見ていた。ゼンは目をつぶって顔を左右に振った。

「残念だ。親友なら俺の考えを分かってくれと思ったのによ」

「分かるよ。でもお前は間違っ・・・」

「甘いんだよっ！お前は」

僕が見たことのないゼンがそこにはいた。

「俺は野良犬から頂点になってやる。その手始めはもうしておいた」
「は？」

「俺には同じ志を持った仲間が何人かいるんだ。どいつもこいつも腕がいいレジェンドだよ」

「？」

「まだ分かんねえのか？」

ゼンの口元がかすかに動いた。

僕には笑っている様に見えた。

「お前が俺の申し出を断ったとき、俺はそいつらにだけ分かる蒸気を送ったよ。そしてその意味は・・・」

強いレジェンド、僕が断ること、ここまで僕を連れてきた意味。僕の中で今全てがつながった。

「村を襲つことだよ」

このピラミッドの通路にゼンの笑い声が響いていた。

「ちくしょっつ！」

僕はいらだっている気持ちを抑えながら冷静にここまでの通路を思い出し、出口へ向かった。

第八章（後書き）

□□□□とコメントお願いします

第九章

これでいい。

上手くミナトをだませた。

ほっとする気持ちを一緒に罪悪感もこみ上げてきた。

ミナトに話したことにだいたい嘘はない。

村を壊滅させたこともだ。

変革には犠牲が必要なのだ。 楽をして何かを変えようと言うのは無理な話だ。

少なくともミナトには俺を越えてもらわなければならない。

今のあいつのネックになっているのは甘さだ。

自分の事を僕と呼ぶ時点で温厚な感じだ。 それでは相手に威圧を与えることすら出来ない。

俺が村を壊滅させることで、ミナトは俺を恨む。

それでいいのだ。 ミナトの感情は怒りが支配するだろう。

そうだ。 鬼の様に非情になれ、ミナト。

そして俺を殺しに来い。

ミナト、お前が俺を殺した暁には全てを教えるさ。

そしてミナトは俺の意志を継いでくれるだろう。

そう「レセル」をミナトなら倒せる。

正の感情では強さに限界がある、負の感情でないと。

頼む、ミナト。

ゼンの野郎、いつからあんなになつたんだ？！

僕と過ごしていたときはあんな風じゃなかったのに。

残る全ての力を振り絞り、僕は村へ向かった。

・
・
・
・
・

村に着くと僕は愕然とした。多少、予想していたが、想像と現実の違い物だった。村はほぼ全焼させられ、家々は崩れ火に飲まれていた。辛うじて形を保っている物もあるが今にも倒れそうだった。ある1つの家を見ると生々しい、血の後も付いていた。

僕はのどにこみ上げてきた物を全てはき出した。きたない。

そんな僕に雨が降った。まるで天候だけが僕を慰めているかのようだった。すでに僕はぐしょ濡れで服の奥にも体の奥にも悲しみが伝わってきた。

もう何もない。僕を取り巻いていたこの環境はもう無くなった。友と遊ぶことも恋人とキスをすることもない。親に抱いてもらうこともない。全てがあった場所にはもう何もない。

「どうだよ？ミナト」

横にはゼンがいた。

「お前が断ったばかりにこんな事になったんだぜ？」

「俺が憎いか？」

何も言えない。答える気がしない。でも答えなければ。

「・・・憎いよ」

「そうか。ついに親友でもなくなっちまったな、俺ら」

「お前が言うセリフかよ」

「そうだな」

今はゼンへの憎しみよりも悲しみの方が大きくて何もできない。

「まあ、俺はずいぶん前からここを離れた身だからよ。何にもって言ったら嘘になるが、そう悲しくはねえよ」

「なら・・・」

僕は・・・俺は唾を飲み込んで、決意した。

「俺がお前を殺してやるよ」

第九章（後書き）

□□□□とコメントお願いします

第十章　第一部終

雨がやんだ後、俺は形の残っている骨を全てかき集めて誰かも分からないけど墓を作って埋葬した。肉がまだくっついてい骨もあった。

そついうのを見ていると普通は泪がでるのかもしれない。でも俺の泪は出てこなかった。冷酷になったのかもしれない。

それでもいい。むしろそれの方がいいのかもしれない。

雨がやんだ後は熱い。体が蒸されている感じだ。でももつとひどいことをされても全然良かった。俺の体には村のみんなから罰が必要だ。

その償いとして俺はゼンを殺す、絶対に。復讐だ。

「あゝ、センナの遺骨はねえからな」

「・・・何で」

「・・・あいつは俺のスパイだかな」

「・・・そうか」

あいつが、この村を離れるときに言っていた言葉だ。でも今の俺にセンナなんていらぬ。今の俺に必要なものは力だ。ゼンを殺すための力、それも圧倒的な。

俺がそんな事を考えていたら、一匹の鳥が俺の前に舞い降りた。その鳥はよく見ると、羽が炎のように燃えさかっている感じで鳥の全てを赤が取り巻いている。目は透き通るような青だった。真っ直ぐ

に俺の方を見ている。不死鳥だ。

不死鳥は俺に向かって一喝するように大きく啼いた。不死鳥は啼いた後に俺の肩に飛び乗った。そして俺は新たに決意することになった。

「あいつを殺すまで、俺は死なない。あいつを殺すまで俺はフェニックスになってやる」

そう、あいつの世界を終わらせる時まで俺は不死鳥となる。

第十章↳第一部終（後書き）

一応、話に区切りがついたんで第1部を終わらせていただきます。
でも第2部は書き続けるので、みなさん！これからも「エンド・ワールド」をよろしくお願いします。

□コミやコメントもお願いします

十一章ゝ第二部始ゝ（前書き）

二部目になりますがよろしく願います。

十一章　第二部始

「ある村に仲の良い二人の男の子がいました。その内の一人は村を出て、いろいろな街を回りました。もう一人は村に残り、仕事に精を出していました。村を出た方の男は強くなり、悪を倒そうとしましたが自分の限界を知りました。そして仲の良い人に自分の願いを託しました。託された男は託した男に憎しみを抱きました……」

「なんで嫌いになつたのぉ？」

「それは託した方が託された方に酷いことをしたし、酷い事を言つたからだよ」

「じゃあ、その続きは？」

「ああ。それはまだ俺も知らないんだ」
「何それえ」

俺は道の片隅で死にそうになつていた少女に食事を与え、俺とミナトの話をした。もちろん、自分だと言うことも伏せたし、名前も明かしていない。

「いつになつたら話してくれるのぉ？」

「いつになるんだかは俺にも分からないさ」

「ええ」

「大丈夫。ノーラが大人になる頃には話せるさ」

「ふん」

まあ、それが俺でないことは確かだけど。

俺は意味のないことをしようとは思わない。だからノーラを助けた。彼女は俺とミナトを近づける役目をするだろうと、俺は踏んでいる。

「じゃあ、俺はこれでね」

「うん。また会える？」

「会えるさ」

どうだか分からないけど。

「じゃあ、いいや。バイバイ」

俺は彼女に背を向け、街を出た。

俺は今からしなきゃならないことがある。とっても重要だ。

レセルの場所はもう分かっている。何年を調べてパターンをつかみ、次に訪れる場所を予想した。予想という割には確信に近い。

「よく俺達の場所が分かったな。だてに何年も俺らを追ってないって事か」

「まあ、そういうことになるな」

「で、今回も俺達を倒そうするのか？無駄なことなのに」

「ああ、無駄だよ。分かった。だから今回はそんな用事じゃないんだ」

レセルの俺と話していた男が不思議そうに俺を見た。そりやそうだろうな。今まではレセルを倒すだけの一点張りだったんだから。

でも今回は違うんだよ。と俺は言った。

「じゃあ何が目的なんだ？」

「俺も仲間に入れて欲しいんだ」

「なに？」

語らしてもらうぜ、と俺は下を向いて言った。

「俺は何度もお前達に挑んでそのたびに殺されかけた。それでも、結構強いと自負していたんだ。それがぼろぼろにやられたんだからシヨックは受けたよ。でもそれ以上にお前らの仲間になりたいと思ったんだ。世界を破滅させるんだったら、俺ももちろん生き残りたい」

「最初は俺一人だったレセルも今は七人。全て俺が認めた奴だ」
「.....」

「仲間になりたいのなら、俺を認めさせろ」

そう来ると思ったぜ。俺が見てる時に仲間に入り損なった奴を少なからず見てきた。正直、奴の動きや癖はだいたい読める。

「できるさ」

「その自信がどこから出てくるんだかな」

自信？そんなのミナトに思いを託したときから決めてたんだ。俺は憎まれる奴になろうと。その内にミナトはレセルを知る。それで、俺と同じ目的だと分かってレセルを倒そうとする。

だから、だから、俺はレセルに入るんだ。いや、入らなければなら
ないんだ。

「ギア1・ボセイダム魚龍人」

十一章〱第二部始〱（後書き）

〱〱〱〱や〱メ〱ント〱〱願〱い〱し〱ま〱す

十二章

砂漠、盗賊とある男が対峙していた。

「た、たのむ。命だけは」

「解せねえな。それはお前の心臓だけを無傷にしろって事が、それとも生かして欲しいのか？」

男は手から火を出しながら言った。

「や、やめてくれ」

男は何のためらいもなく盗賊に火をつけ、燃やした。

「答えになってねえよ」

ゼンとの事件からすでに時が経ち、ミナトは18歳になっていた。ミナトはいくつかの街を旅し、いろいろな物を見た。そして冷酷になったのだ。さっきも別に何かを思ってた事ではない。

新しい街に着くとミナトは食料を新たに買い、適当な宿を見つけ泊まった。

ミナトはベッドに寝っ転がって昔のことを回想していた。

思うとあの日から俺は変わったんだな、当たり前だけど。

あの日、俺の肩にいた不死鳥はいつの間にか、いなくなっていた。俺がボーッとしていると、どこからともなくさっきの不死鳥の鳴き声が聞こえた。俺は周りを探したけど、どこにも不死鳥はいなかった。

もう一度鳴き声。それで分かった。さっきの不死鳥は俺の中に入っただの。そして俺の能力も分かった。火だ。これでゼンを灰にする。跡形もなくしてやる。

憎しみを忘れないために、体に入れ墨を彫ってもらった。不死鳥が舞い、魚龍を倒すような画を彫ってもらった。絶対に、憎しみを忘れないために。

まあ、俺だけの力でゼンに近づくのは難しくないとしてもあいつが何人かと一緒に行動してるのは確かだ。ならば俺も仲間を連れる必要がある。それも俺にしたがってくれるような人間がいい。

いざ俺とゼンが戦うときに邪魔してくるような仲間は欲しくない。つまり、俺に完全に屈服させるか憧れを抱かせる、そうすれば俺には逆らわない。他にも手はあるだろうけど今はそれだけでも良いだろう。

コンコン

ミナトは自分の部屋がノックされてるのだと気づき、戸を開けようとした。この宿は部屋と部屋の間隔があまりなく、ノックは隣の客の部屋のそれと間違えやすい。

「夜ご飯の用意が出来ましたので、食堂へ来てください」
「・・・分かった」

ミナトは素っ気なく言葉を返すと、一旦部屋の隅に戻ってコートを着た。砂漠は昼はとてつもなく暑いが夜になると一変して寒くなる。

十二章（後書き）

口コミとコメントお願いします。

第十三話

街に無断で入ることは世界統一で禁止と決められていた。犯罪者やテロリストをたやすく待ちに侵入させないためだ。だから街に入るには、入行書というのが必要だ。関所などで発効することができ。ミナトはそれを持っていなかった。手に入れる必要はあったが何より手続きが面倒だった。

そして、それは今回だけではなかった。今までの街でも何とかやり過ごせてきた。だからこの街でもやり過ごせるだろうと思っていた。

今回、ミナトが来た街は入行書の検査が厳しかった。だからここに来る前に盗賊の入行書を奪っておいた。

たいてい、その検査が厳しい街はすべての規則が厳しい。入行書は手始めといったところだろう。

だから、ミナトは多少のことは承知していた。それに自分の力ならだいたいのはやりとおせると思っていた。

「ミナトはいるか？！そいつは凶悪犯だぞ」

とか言って、この街のレジエンドが俺の止まっている宿に来たとしても、

「今から、全員調べるから」

とか言って、ついに俺の番になっても、

「お、お前ミナトじゃないのか！？」

とか言って、周りの客がめっちゃくちゃ驚いたとしても、俺は力でこの場を切り抜ける。

ミナトは、両手を合わせ自身を炎にした。炎になるとレジエンドの横をあざ笑うように通り抜けると同時に、レジエンドの周りに火の輪作った。これでレジエンドは動けない。今のうちに逃げよう。

これでまた、街を移動しなきゃなくなっっちゃったな。めんどくさいったらありやしない。

ミナトはヒト型に戻ってから全速力で逃げ出した。炎のままだと、何かと困る。

その時

「へーだ。あたしがこんなところで捕まるわけないでしょーだ」

ミナトよりも少し年下の女の子がミナトのほうへ走ってきた。

「おい、危ないって！退けよ」

「はあ！？あたしは今かなり忙しいの！」

「なに？」

「まあ、いいよ。あんたも逃げてるんでしょ？」

「まあ・・・」

「じゃあ、着いてきてよ」

俺はしぶしぶ彼女のあとを追った。俺よりも彼女のほうがこの街には詳しい。今は彼女の言うことを聞くことにしよう。

第十三話（後書き）

コメントと口コミお願いします。
たぶんペースが落ちるのでご了承してください。

第十四章

ミナトは少女の後に続いて走った。少女が細い道を曲がったりしながら走ったから、ミナトは追いかけるのがちよつと大変になった。でも、ミナトは少女とはぐれることなく着いていくことができた。少女はチラチラミナトのほうを見て、実はちゃんと心配してくれているのだと思った。

二十個ぐらい角を曲がった後

「たぶん・・・ここまで来れば、ハア。大丈夫だよ」

「そつ、ありがと」

「別に、あたしも逃げるときだったんだからお互い様だよ」

「・・・ああ」

少女はヘタつと座り込んだ。その後、ミナトは礼を言つてに帰ろうとしたが、少女にちよつと待ってよ、と声をかけられた。

ミナトは意味が分からずに首をかしげた。

「ほら、せつかくだし話そうよ」

ミナトは少し考えてから、いいよと言つて少女の横に座った。

「あたしはノーラって言ふの、そっちは？」

ノーラはミナトに向かつて顎をしゃくった。

「俺はミナトだよ。ところでなんで逃げてたの？」

ノーラは口を尖がらせて、うゝんと唸った。

「だって、あたしお金ないから。そんなのが生きてくには一つしか方法ないでしょ？」

「まあなあ。俺もそんなもんだからね」

「ミナトは何してんのさ」

ミナトはこれまでのいきさつを話した。ミナトが話している間、ノーラは真剣に聞き入っていた。時々、眉毛をピクッと動かしていた。

でもミナトはそんなことには気づかなかった。ミナトがすべてを話し終え、フーと息をつくとき、ノーラが立ち上がった。

「あたし、ミナトについてく」

ミナトは、内心で喜んだ。さっきの話はミナトの悲しみや苦しみが伝わるようにちよつと加工もした。つまり、ノーラの同情を誘った。ミナトに同情すれば、ミナトへの反抗は減る。

「え、でも・・・」

「いいの！あたしが決めたことなんだから、反論は許さないよぉ」

ミナトは、少し厄介なのが仲間になったと思った。

第十四章（後書き）

二週間に一回の割合で月曜に更新していくつもりです。今年、高校生になり、学校が大変なのです。ロコミやコメントお願いします。

第十五章

新たに、ローラを仲間としたミナトは町を出ることをローラに告げた。ローラは一瞬、嫌そうにしたが、

「しょうがないね、旅に出るんだから」

と、笑顔になった。その顔を見たミナトも心が温まる感じがした。レジェンドの力は、覚醒するものだ。体の中に眠っていたものが噴火するように覚醒する。それには、何らかの衝動や出来事、感情の変化が必要である。ミナトもあの出来事を境にレジェンドの力を使いこなせるようになった。逆にいえば、そういったものを持っていても、衝動などがなければ、覚醒しない時もあるということ。最強の力を持っていても、その力は眠ったまま終わるかもしれない。ダイヤモンドも埋まったままのこともあるのだ。そして、覚醒しても力は磨かなければ強くはならない。それとレジェンドの力はレジェンドの近くにいることで、限りなく覚醒は早まる。

いつか、ローラにも力が眼覚めるときが来るのかも知れなかった。そうなれば、ローラは戦力にもなる。

ミナトとローラは荒野を歩いていった。ミナトは何回も経験した道だけれど、ローラは全くの皆無だったので昼の暑さや夜の寒さも知らなかった。それでも、ローラは、黙ってミナトに付いていった。

ミナトは、心配しつつも歩みを止めなかった。

「そっういえば、聞いたことがあるんだけどさ」

「ん？何が？」

ローラが正午近くの時に、苦しそうにミナトに話しかけた。今日、荒野を歩き始めて最初の会話だった。

「世界征服って信じる？」

「・・・何、いきなり」

「聞いたことがあるだけだよ？でも、確かに動いてるんだって」

「だから、何が？」

「その、世界征服の組織が」

ミナトの頭の中で、世界征服という言葉が何回も繰り返された。そのうちに、世界征服は人類滅亡とつながってくるのではないかと思いはじめた。自分の仲間だけを生き残し、その他は滅亡させる。つまり、世界征服。

「あ、関所」

「……」

「ミーナートー」

「あゝん？」

「関所」

「めんどくさ」

関所はいろいろとめんどくさいことが多い。持ち物を調査されたりするのだ。でもこの関所を通らずには荒野は乗り越えられない。

「いつちよ、やるか」

「あたしは？」

「なんもしなくていいよ」

ノーラはほっとした様子で肩をなでおろした。

第十五章（後書き）

遅くなつてすいません！

口コミとコメントお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7181f/>

エンド・ワールド

2010年12月7日02時18分発行